

# 新しい木の文化への気付きと山間地の再生

## 北国の雪と緑 の中で育って

筆者は、山形県鶴岡市の山里に生まれ中学卒業までそこで育った。小学校4年までは分校に通い、5年から本校に歩いて通った。小学校の分校は、冬になるとさらに3つの「冬季分校」に分けられるほどの山村であった。50年前は豪雪のため、冬季は3回も屋根の雪下ろしをした。その雪は軒下に取り、2階の屋根から家の庭の出口、その前にある村の通り道もスロープで、ぐるっと回ると、100メートルを超えるスキーのゲレンデとなった。したがってスキーは得意であった。4月の時期は雪解けとなり家の目の前は水溜を増した。360度を見渡せば杉林の山で囲まれており、辺りの木々の若葉も緑を増した。山里を抜ける川沿いや道路沿いの平地は田んぼとなっているが、緑一色で美しい。懐か

しい思い出である。

こうした山間に暮らすと、優しさや穏やかさに包まれ、どちらかというところ視野が狭まり、かつ、圧倒的な神々しさが人間を押しつぶしているかもしれない。しかし、5年から本校に歩いて通った。小そこ育った人間は、それが普通であり、とりわけ不都合とは思わない。村を流れる川を下れば、平

## 北山杉の成功 に学ぶもの

京都の北山杉の山地、京都市北区中川北山町の林業家の中田明氏を訪ねたことがある。北山も山間、小さな清滝川が里を貫流する。中川という地名はぴったりで、誰もが納得である。筆者の生まれた村の地名は田川であり、これもぴったりの名前である。

地の田んぼが次第に広がる。さらけ伸ばす作業技を完成させた。に下れば、山は背中になり、目の前には海が広がる。日本海である砂で磨き上げた「磨き丸太」として、商品価値を高めた。さらに表面に皺や凹凸が突然変異により現れたものは「天然出絞」丸太と呼ばれる。一層の価値を生み出した。「天然出絞」は中田氏の祖父が発見したもので、これを人工的に作り出す挑戦が成功し、「人工絞」丸太の技術が完成し、銘木の「北山杉」のブランドと需要を創り出

2層のところが台座として数十本の丸太杉が伸びた「台杉」をつくり、ついには、根本から天空までの一本の丸太杉を、枝打ちして小枝を残さないようにし、上だけ柄と時代に由来し、京都ならではの公家文化や武家文化の発展と相補的な関係がある。例えば、桂離宮・修学院離宮・大徳寺での利用、千利休による茶室での、床柱への利用が大きく影響した。需要と供給の高まりが、北山杉や北山の暮らしを特徴づけた。無二の地元力をつくった。

## 地元力発見!

⑬

その地に生きる人々の生き残りを掛けた永年の挑戦の結果であった。そして、根本は一本だが、1

佐藤建吉 「洗楓座」代表

本は一本だが、1



真直ぐに天を衝く北山杉

残念ながら筆者の田川の村には、そうした刺激や背景が伴わず、一般的

な森林需要の波に吞まれている。今日の人びとの、洋間中心、あるいはマンション志向により生み出されたその波は、さらに大きくなり、北山杉ですら需要が低下している。新しい木の文化を日本人の精神に呼び起こす必要がある。これは、全国で共通したものであるが、自然への眼差しの変化により改善の空気が少しは流れてきたようにも思える。北山杉の家具や装飾への利用がコスモポリタンアイトとして、木質文化への気付きを創り出している。それは、山間の地の蘇生をも導くと期待したい。

1950年山形生まれ。

東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授(金属疲労専攻)。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事